

1

1 I こうし
II 三
III ア 新し
イ 語感

2 3

3 (記述題)

5 イ 流行

7 ア 1 2 1

8 a 意 図 多 用 今 後

2

1 a 形 相 他 意 切 実

2 A よ 矢 根 工 ア ア ウ

4 工 家族の祈 ア (記述題)

8 焼きもち 9 工 10 絵馬が失 11 八

1

4 新しさを感ぜることが重要
であり、適度に知らせること
がない言葉
を使うと効果的であること。

2

7 生まれてくる弟か妹への焼きもちから、絵馬堂へ行くのをとおっくうに思ったため。

(同意可)

(同意可)

| 配点 | |
|-------------|------------|
| 1 7・8 2 1・2 | 各2点×12=24点 |
| 1 4 2 7 | 各6点×2=12点 |
| その他 | 各4点×16=64点 |
| 100点 | |

1

線①の問いかけに対し、——線②までが「クールビズ」とはどういうものかの説明になっている。Iで問われた「クールビズの目的」やIIで問われた「クールビズの効果」については、ここで「目的」や「効果」という言葉ともにくわしく書かれているので条件に合った答えをていねいに探していけばよい。IIIは——線①の問いかけの答えにあたる部分が問われている。急速に普及する外来語がどういものかは本文に明記されていないが、世の中に普及した「クールビズ」や「ハローワーク」のよいところが何であるかを読み取り、それが急速に普及する外来語の説明にふさわしいかを照らし合わせればよい。

2 ——線②の後の「一つには」から並列の形で「クールビズ」が急速に普及した理由が書かれていた。その理由の一つは政府の推進に民間が応えたことであり、その後「省エネルギー」の失敗例と対比させる形で「クール」や「ビズ」といった言葉の命名の良さとそれにもなうファッション業界の後押しについて書かれていた。3の後からは外来語による「既にあつたものの言い換え」の話であり、「クールビズ」について説明した部分ではない。

3 アウエの言葉について本文でどう書かれていたかを探っていくと、「ビズ」について「日本ではまだ余り使われていなかった新鮮な言い方」と書かれている。「余り使われていない」や「新鮮な」という要素が、「適度に分らない」という言葉と意味が対応している。

4 特に指示語や接続語で結ばれていないが、直前の内容と「同じこと」である。字数に苦手意識を持たずに過不足なくまとめよう。「命名」と「広告」との共通点なので、どちらかにかたよつた説明になつてはいけない。

5 堅苦しくなく親しみやすい「ハローワーク」という言葉が「直接的な言い方」ではない、ということなので、アやウのようにプラスの意味合いでとらえているものはまちがいである。また、「直接的」という言葉から「回りくど」というのは結びつかないので、答えはイと考えられる。

6 「定着しない」と同じ意味の言葉を探すのであるが、意味だけをヒントに文章をたどっていくのではなく、「E電」が定着しなかったという文の流れから、「E電」がどうなったのかを探していくことも解き方の一つである。ただし「E電」の説明は——線⑥の一文にしかないで、「E電」と同じように定着しなかったとされる「省エネルギー」がどうだったかを調べると答えが見つかる。

7 助動詞の「れる・られる」には「受け身」「尊敬」「自発」「可能」の四つの意味があることも覚えておこう。中でも「受け身」が使われている文では、「だれが」「だれによって」の両方をきちんとおさえることが大切である。

8 a「意図」は前後の意味を考えれば「糸」ではないことは明らかである。カタカナの部分だけを見て早とちりしないように気をつけよう。b「多用」も「多様」とまちがえないよう、よく意味を考えて答えたい。「用」の五画目はきちんと下につき出そう。c「今後」は「後」を雑に書いてはいけない。とくに画数が変わってしまうような書きまちは×になるので気をつけよう。

2

1 a「形相」は「強い感情の表れた顔つき」という意味である。この他にも「人形」や「異形」など、「形」と書いて「ギョウ」と読む言葉覚えておこう。b「他意」は「他の考え」ということである。熟語は字の意味と言葉の意味を結びつけて覚えていこう。また、カタカナだけを見て「対」や「体」などとしなないようにしよう。c「切実」は「切」の「七」と「刀」のところを出してはいけないところを出したり、出すところを出さなかつたりしないように気をつけよう。

2 このような慣用表現は語句ドリルや用語集のようなものではなかなかつかげられないものである。ふだんから知らない言葉やさつと意味が出てこない言葉に敏感になって、自信のないものはすぐ調べていくようにしよう。

3 (I)は直前の「きらめく川面」と対応している。川はきらめいているが、雪の心はきらめくどころではない、ということである。(II)は恐ろしいな形相で走ってくる子供をすっかり恐れてしまい、動作がおそくなっている様子である。(III)は絵馬をなくしてしまったことにすっかりしよげかえつてしまい、動作がおそくなっている様子である。

4 多津の安産を家族全員で祈願して絵馬に絵や字を書き入れているところである。「まっさらな絵馬」に犬の絵を描いたのだから、最初に筆を入れたのは源太夫であるし、犬は安産のお守りであった。絵馬を落としてしまったときに「家族全員の思いがこもった絵馬だ」と書かれていることから、雪の名が最後に来ているのは末っ子だからであり、焼きもちから名前を書くのをしぶつたとは考えにくい。

5 ——線①に続くところに、「家族の祈りを納める役が雪にまわってきた」とある。すぐに結びつかなかった場合も、「役」という言葉に注目して文章をたどっていけば答えが見つかっただろう。

6 文中の比喩が何をたとえているかも気をつけて考えていきたい。ここでは絵馬に何かあつては困る雪と、自然の法則にしたがつて飛んでいく絵馬とが対照的に描かれており、雪の危機的な状況が浮きぼりになっている。

7 ——線④の二行後にある「でも、ちがう」からのところに、このときの雪の真意が書かれている。心情の記述も苦手意識を持たず、問われている場所の周りや場面の流れをおさえて、心情とその理由にあたることおさえていこう。

8 絵馬を見るときの、つまり生まれてくる弟か妹を思うときの雪の気持ちである。この物語は雪が生まれてくる赤ちゃんに焼きもちを焼いたことから次々とできごとがながっている。このような前後の流れを作る心情は通読時からおさえておき、話の流れとともにイメージを強く持つておきたい。

9 ここでは全体のイメージから何となく答えるのではなく、この場面がどういう場面かをしっかりとおさえて答えたい。——線⑥の行頭の「そういえば」からまとまった考えが書かれている。

10 ここまでの話の中で「不吉なこと」と言えば見当はついただろうが、それだけに頼らずしっかりと答えの根拠となる表現もつかんでおきたい。ここでは「不吉な話」と「恐ろしい考え」の意味が対応している。

11 父が源太夫、母が多津、兄弟が源太郎と源次郎、姉妹が里、秋、雪、そして赤ちゃんの八名である。——線①のところに家族の名が並んでいるが、ここには母の多津がぬけていることに気をつけよう。以上